

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26285018

研究課題名(和文) 治療的司法論の理論的展望と日本的展開：当事者主義司法の脱構築に関する学融的研究

研究課題名(英文) Theoretical view and development of therapeutic jurisprudence in Japan:
cross-disciplinary approach for reconstruction of the adversary criminal justice system

研究代表者

指宿 信 (Ibusuki, Makoto)

成城大学・法学部・教授

研究者番号：70211753

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、法学、心理学、社会学、精神医学など多様な学問領域の専門家による「治療的司法」概念の検討が多角的に進められ、刑罰重視型より更生支援型刑事司法が再犯防止に有効という海外の先行する知見が、我が国においても通用することが明らかした。第二に、更生支援を具体的に進めるための支援や治療を提供する社会的資源となる「プロバイダー」が各所に存在し活動を進めているが、治療的司法観を共有することができることがわかった。第三に、刑事被告人や被疑者に最も近接する立場にある弁護人が、相当程度現行の刑事司法制度の中でも治療的司法に基づいた処分や処遇を進めることが可能であることが明らかになってきた。

研究成果の概要(英文)： At first, through our collaboration research from the different academic fields, we found that even in Japan the idea of the therapeutic jurisprudence could be worth and useful.

Second, we found that in Japan there are so many sectors and professionals which provides support and therapy to the defendants for their rehabilitation. And we made it clear that those people will be able to share the therapeutic jurisprudence as a common understanding for administration of criminal justice system.

Third, we conclude that the defense attorneys would be in the best position for giving required assistance and help to the defendants for promoting their rehabilitation and that they would be the best supporter for caring the defendants even in the current criminal justice system in Japan.

研究分野：刑事訴訟法

キーワード：更生 保護 治療 回復 依存 刑事司法 再犯

1. 研究開始当初の背景

海外において刑罰中心の刑事司法を離れて被疑者被告人の再犯防止を支援することを目的に掲げる「治療的司法観(therapeutic jurisprudence/justice)」に基づく刑事司法の流れが加速しているところ、日本においてこうした観念の有用性、有効性を検証すると共に、こうした新しい司法観に関心を持つ研究者を探索するため、平成23年度から3年間、研究代表者が萌芽的研究として「脱当事者主義モデルとしての治療的司法に関する比較法的研究」を実施し、深堀調査を行なった。そうしたところ、多様なバックグラウンドを持った研究者が明らかになったため、本研究プロジェクトを立ち上げた。

2. 研究の目的

(1) 治療的司法観をめぐる考究と調査

研究分担者を、「被害と加害」、「手続と審判」、「治療と福祉」、「理論と応用」の4チームに分け、それぞれの学問分野の知見や研究動向を踏まえて、治療的司法という考え方をどのように個々の学問分野から正当化し、理論的に受容できるかを考究する。

(2) 国内治療プロバイダー調査と対話

年3回の治療的司法研究会に治療プロバイダーを招待し、そのサービス(支援や治療等)についてヒアリングし、治療的司法観についての理解を得ていただく機会を設ける。

(3) 更生支援型刑事弁護実践例の調査

年3回の治療的司法研究会に全国各地で情状弁護活動の中で社会の治療プロバイダーと協力しながら被疑者被告人の更生を支援するような活動をして実績を重ねる弁護士からヒアリングを行う。

(4) 国際ネットワークの構築

2年に一度開催されている国際的な治療的司法に関する大規模な国際学会において分担者でセッションを開いて意見交換の場を設けたり、世界各地で開かれる治療的司法関連の学会に参加したりして、世界の研究理論動向を把握するよう務めると共に、日本の研究レベルを発信する。

3. 研究の方法

(1) 「被害と加害」チームの後藤は、海外における少年司法における治療的司法の実施状況を確認と、日本の少年司法の変化について、時代的な変化について検討をすることで、日本の刑事司法の中にある治療的司法的要素がどのように変化したかを確認し、それが起きた理由について、文献や立法資料から確認を試みた。同じく安田は、次の3つの観点、すなわち、時間経過でとらえるというものの見方と手法を取り入れ、被害とその防止を切り口に、支援者へのエンパワーを含め、研究を推進した。

(2) 「手続と審判」チームの青木は、法律実務(臨床分野)から刑事司法制度の研究に転じた経歴を活かし、個別の事件から制度的・理

論的問題点を抽出する帰納的な研究方法と、理論的な観点から現実の事件を分析する演繹的な研究手法を併用した。同じく廣井は、家庭裁判所では家裁調査官が法的機能と臨床的機能の両者を架橋し限りなく交差させることによって浮かび上がる司法臨床的機能によって、非行少年やその家族の問題を理解し適切な解決に導いているため、そうした家裁調査官へのインタビューやその実践例に基づく論考や発表をもとに明らかにしようと試みた。

(3) 「治療と福祉」チームの丸山は、伝統的な刑事司法手続きでは必ずしも救うことができなかったヴァルネラブル(社会的弱者)な存在への治療的な介入を行うために「治療的司法」の提唱が行われているところ、国内外で取り組まれている治療的司法の実践とその理論について実態を把握するとともに、より発展的な提案ができるよう進めた。中村は、グループワークでの虐待親たちの語りの内容を考察し、それをケースワーカーと共有し、家族臨床社会学のデータとして編成し、関係性の変化を考察する事例として編み上げた。

(4) 「理論と応用」チームの佐藤は、伝統的な当事者主義的司法と治療法学における司法観における問題解決(Problem Solving)の志向性の違いを理解し、また問題解決ということそれ自体の理論を理解することによって情状心理鑑定の実践についての理論を構築するため、法心理学の歴史を検討し治療的司法の実践における心理学の協同のあり方を検討した。同じく、石塚は、犯罪社会学の基礎理論的な見地から薬物依存症者の自助グループの活動を観察調査することを通して、薬物依存からの離脱・回復の支援枠組みの研究を進めた。

(5) 指宿は、研究活動を統括、助言すると共に、年3回の「治療的司法研究会」をオーガナイズし、各地の治療支援プロバイダーを招聘して活動報告を求め、意見交換を進めたり、情状弁護の場において被疑者被告人の問題解決手法を具体的にどのように展開しているかについて弁護士から報告を求めて裁判所における治療的司法観の受容程度を測定し、更には、精神科医療機関や回復支援施設、東京地方検察庁等のサイトビジットを通じて、治療的司法観と通底する実務の動向とそこでの問題点を吸い上げることができるよう観察調査の機会を立案し運営した。

4. 研究成果

(1) 「加害と被害」チームの後藤は、文献や立法資料から少年司法が治療的司法の理論的実践の場所としての伝統を持っていることを明らかにすることにより、治療的司法という理論が日本にとって必ずしも新しい概念ではないことが明らかになった。同じく安田は、他職種の専門家とのネットワーク構築を進めるとともに、異職種間での専門性の違いによる視点のずれや立場の違いへの気づきと理解をうながすことができた。

(2) 「手続と審判」チームの青木は、治療的司法の手法が、量刑手続と親和性を有することは疑いないという観点から、訴訟法学的な扱いと比較制度論的知見をもって、いわゆる手続二分論に関する研究を進めることができた。同じく廣井は、家庭裁判所と家裁調査官の機能の低下が昨今著しい中、少年事件の刑事司法化などを確認すると共に、少年司法がさまざまな非行に対応した非行治療のための処遇選択となり得ず、非行事実の軽重に従った処分がふり分けに陥っていることを明らかにした。

(3) 「治療と福祉」チームでは、中村は子ども虐待への介入が進めば進むほどその後のケアにかかわる治療的司法論にもとづく家族機能回復への支援が不可欠であるという仮説を検証し、家族再統合を果たした家族の事例観察をもとにした事例を構築しつつ研究することができた。同じく丸山は、治療的司法をめぐる世界的な理論動向を網羅的に把握することができた。

(4) 「理論と応用」チームでは、佐藤は情状心理鑑定の実践の背景にある心理学的文脈主義の理論を明かにするため、法心理学の歴史における対立と和解の具体的プロセスを明確にし、常に起きる法学と心理学の葛藤に関する対処の可能性を記述することに成功した。同じく石塚は、本研究プロジェクトの成果を土台として、我が国の社会において問題を抱える被疑者被告人を刑事手続の枠組みの中で支援するのではなく多様なセクターが一堂に介して支援や援助する社会基盤を創生するため新たなプロジェクトの構築に成功した。

(5) 全体

「治療的司法」観に通ずるような、被疑者被告人の再犯防止を推進する動きが国のレベルでもこの研究期間中に急速に展開するようになった。治療的司法観は時代の要請と見事にマッチすることとなり、学術の立場からもそうした動きを理論的にサポートする必要性が認識されるに至り、前述のJST/RISTEXの助成金を利用して、成城大学に治療的司法を専門に研究する我が国でも初となる「治療的司法研究センター」が平成29年4月に設立され（本研究代表者がセンター長）に至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 44件)

羽瀧由子、赤嶺亜紀、安田裕子、田中晶子、仲真紀子、三原恵、主田英之、法と心理学会第17回大会 ワークショップ 多専門・多職種連携による司法面接の展開 通達からの1年を振り返り、今後の展開を考える、法と心理、査読有、17巻(1)、印刷中

中村正、不安定な男性性と暴力、立命館産業社会論集、査読有、第52巻第4号、2017、1-17

中村正、臨床社会学の方法(16)治療的司法、対人援助学マガジン、査読無、第7巻第4号、2017、22-32

中村正、孤立する関係性とドメスティック・バイオレンス：三重の沈黙化作用(サイレンシング)、青少年問題、645号、査読有、2017、10-17

指宿信、再入率削減のための政策：「治療的司法」に基づく制度・施策の導入を、犯罪学雑誌、査読有、82巻(6)、2016、135-141

指宿信、治療的司法とは何か、季刊刑事弁護、査読無、82号、2016、58-61

指宿信、犯罪研究動向 治療と司法：世界に広がる治療的司法論とその実践、犯罪社会学研究、査読無、41号、2016、114-119

松本克美、金成恩、安田裕子、法と心理学会第16回大会 ワークショップ 児童期の性的虐待被害とその回復をめぐる法心理 2 ドイツ・韓国調査の報告、法と心理、査読有、16巻(1)、2016、69-74

廣井亮二、「非行少年は凶悪化しているか - 現代の非行を考える」、月刊福祉、査読無、7月号、2016、56-57

青木孝之、「現行刑事訴訟法における当事者主義」、一橋法学、査読無、15巻2号、2016、557-577

丸山泰弘、「ポルトガルの薬物政策調査報告・2014-2015」、立正法学論集、査読無、49巻2号、2016、196-234

石塚伸二、「再度の執行猶予再考——「開かずの扉」か？ それとも「狭き門」か？——」、龍谷法学、査読無、第48巻3号、2016、1-30

中村正、臨床社会学の方法(15) 社会的孤立と感情的苦痛 嗜癖と嗜虐の背後にあるもの、対人援助学マガジン、査読無、第7巻第3号、2016、23-35

中村正、臨床社会学の方法(14) 男らしさのラビリンス(迷宮) 対人援助学マガジン、査読無、第7巻第2号、2016、28-39

中村正、暴力臨床の実践と理論、季刊刑事弁護、査読無、第87号、2016、74-77

中村正、臨床社会学の方法(13) 社会構築主義、対人援助学マガジン、査読無、第7巻第1号、2016、20-29

中村正、臨床社会学の方法(12) ブランド・ハプスタンス-計画された偶発性、対人援助学マガジン、査読無、第6巻第4号、2016、20-30

中村正、社会問題研究における社会構築主義と批判的实在論、立命館産業社会論集、査読有、第51巻第4号、2016、191-211

中村正、暴力臨床論の展開のために 暴力の実践を導く暗黙理論への着目、立命館文

学、査読有、第 646 号、2016、100 - 114
 松本克美、村本邦子、安田裕子、金成恩、後藤弘子、法と心理学会第 15 回大会 ワークショップ 児童期の性的虐待被害とその回復をめぐる法と心理、法と心理、査読有、15 巻(1)、2015、84-89

②① 青木孝之、「取調べを録音・録画した記録媒体の実質証拠利用」、慶應法学、査読無、31 号、2015、61 - 87

②② 須藤明、岡本吉夫、村尾泰弘、丸山泰弘、「米国シアトル市の刑事司法事情」、司法福祉学研究、査読無、15 巻、2015、94-106

②③ サトウタツヤ、TEA(複線径路等至性アプローチ)、コミュニティ心理学研究、査読無、Vol.19、2015、52-61

②④ 中村正、臨床社会学の方法(9)日常生活、対人援助学マガジン、査読無、第 6 巻第 1 号、2015、18 - 26

②⑤ 中村正、DV のある家族への支援とは、保健の科学、査読有、第 57 巻第 6 号、2015、361 - 387

②⑥ 中村正、臨床社会学の方法(10)サイレンシング(沈黙化作用)、対人援助学マガジン、査読無、第 6 巻第 2 号、2015、20 - 29

②⑦ 中村正、DV 加害者の脱暴力への臨床実践、日本医事新報、査読無、第 4771 号、2015、51

②⑧ 中村正、臨床社会学の方法(11)マトリックス-その暴力は偶然ではない、対人援助学マガジン、査読無、2015、19 - 28

②⑨ 中村正、臨床社会学の方法(8)臨地の思考、対人援助学マガジン、査読無、第 5 巻第 4 号、2015、14-26

③⑩ 安田裕子、林久美子、佐伯昌彦、山崎優子 他、法と心理学会第 14 回大会 ワークショップ 犯罪被害者をとりまく問題 臨床心理学、法社会学、法心理学からの検討、法と心理、査読有、14 巻(1)、2014、56-62

③⑪ 山崎優子、サトウタツヤ、稲葉光行、斎藤進也、徳永留美、安田裕子 他、ひらめきときめきサイエンス「模擬法廷に来て裁判に参加してみましよう」の実践および論考、立命館人間科学研究、査読有、30、2014、87-96

③⑫ 廣井亮一、「司法臨床としての情状心理鑑定」、現代法律事務の諸問題、日本弁護士連合会編、査読無、平成 25 年度版、2014、928-941

③⑬ 廣井亮一、「ストーカー加害者への司法臨床」、犯罪と非行、公益法人日立みらい財団編、査読無、第 178 号、2014、68-83

③⑭ 廣井亮一、「規範意識と非行」、児童心理、査読無、No.987、2014、101-106

③⑮ 廣井亮一、中川利彦 「学校における法にかかわる問題への対応 - : 法と臨床の協働 - 保護者対応」、児童心理、No.979、2014、119-125

③⑯ 青木孝之、「公判手続・公判前整理手続」、査読無、刑事法ジャーナル、39 号、2014、12 - 17

③⑰ 青木孝之、「被疑者取調べ」、査読無、法学セミナー、713 号、2014、106 - 111

③⑱ Sato, T., Yasuda, Y., Kanzaki, M., & Valsiner, J., From Describing to Reconstructing Life Trajectories:How the TEA (Trajectory Equifinality Approach) explicates context-dependent human phenomena、Culture Psychology and its Future、Vol.1、査読有、2014、93-104

③⑲ 中田友貴・サトウタツヤ、被告人の国籍が裁判員の量刑判断に与える影響、立命館人間科学研究、査読有、Vol.30、2014、45-63

④⑩ サトウタツヤ、司法臨床としての情状心理鑑定、日弁連研究叢書 現代法律実務の諸問題、査読無、平成 25 年度研修版、2014、909-927

④⑪ 中村正、臨床社会学の方法(5)日常行動理論、対人援助学マガジン、査読無、第 5 巻第 1 号、2014、19-28

④⑫ 中村正、男性性・男性問題をめぐる臨床社会学-親密な関係性研究に焦点づけて-、立命館産業社会論集、査読有、第 50 巻第 1 号、2014、73-95

④⑬ 中村正、臨床社会学の方法(7)対人援助と民主主義、査読無、第 5 巻第 3 号、2014、19-31

④⑭ 中村正、臨床社会学の方法(6)共軛関係、対人援助学マガジン、査読無、第 5 巻第 2 号、2014、19-28

〔学会発表〕(計 38 件)

中村正、脱暴力に向けた保護者へのグループ・アプローチ 児相と民間(大学)の協働 日本子ども虐待防止学会第 23 回おおさか大会、2016 年 11 月 25 日、大阪国際会議場、大阪府大阪市

中村正、山極寿一、黒田公子、大会企画シンポジウム：なぜ、人間の子育てに共同保育が不可欠なのか？～多様に協働・共同する子育てと暴力・虐待防止～、日本子ども虐待防止学会第 23 回おおさか大会、2016 年 11 月 24 日、大阪国際会議場、大阪府大阪市

福島至、指宿信、森久智江、水藤昌彦、シンポジウム 刑事司法と対人援助、2016 年 10 月 30 日、犯罪社会学会、甲南大学(兵庫県神戸市)

丸山泰弘、アメリカの薬物政策の動向：ドラッグ・コートなのか非刑罰化なのか、第 27 回日本嗜癮行動学会、2016 年 10 月 22 日

中村正、菅原直美、指宿信、情状弁護の質的転換を考える、第 17 回法と心理学会、2016 年 10 月 16 日、立命館大学いばらきキャンパス、大阪府茨木市

羽淵由子、赤嶺亜紀、安田裕子、田中晶子、仲真紀子、三原恵、主田英之、多専門・多職種連携による司法面接の展開 通達からの 1 年を振り返り、今後の展開を考える、法と心理学会第 17 回大会、2016 年 10 月 16 日、立命館大学(大阪府茨木市)

廣井亮一、村瀬嘉代子、二宮周平、山口直也、安田裕子、公開シンポジウム 子どもをめぐる法と心理臨床、法と心理学会第 17 回大会、2016 年 10 月 16 日、立命館大学(大阪府茨木市)

中村正、情状弁護の質的転換を考える、第 17 回法と心理学会、2016 年 10 月 16 日、

立命館大学いばらきキャンパス、大阪府茨木市

廣井亮一、「質的研究における研究と実存の間 - 司法臨床としての情状心理鑑定をもとに」、第13回日本質的心理学会 2016年09月25日名古屋市立大学(愛知県名古屋市)

中村正、「物語」を手掛かりにした東日本大震災後コミュニティ支援の実践 - ホモ・ナラティブリスト(物語る人間)と聴く人が出会う「復興の証人10年プロジェクト」から、第8回対人援助学会、2016年09月25日、神奈川県立保健福祉大学、神奈川県横須賀市

中村正、國友万裕、男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために(その5) 1980年代「ぼっち君」の大学生活にみる男性性ジェンダーの考察、第8回対人援助学会、2016年09月25日、神奈川県立保健福祉大学、神奈川県横須賀市

中村正、対人援助学会理事会企画シンポジウム「相模原事件を考える」、第8回対人援助学会、2016年09月24日、神奈川県立保健福祉大学、神奈川県横須賀市

廣井亮一、河野聡、中川利彦、河野聖子「法と家族臨床 - 司法臨床のアプローチ」第33回日本家族研究・家族療法学会 2016年09月16日ハウステンボス・タワーシティ(長崎県佐世保市)

Yasuda, Y., Troubles and tasks of the support for victims received damage of domestic violence (DV): Toward the view to support lives of sufferers in community, the 31st International Congress of Psychology ICP2016, 28th July, 2016, PACIFICO Yokohama (Yokohama, Japan)

中村正、國友万裕、対人援助学の課題としての男性問題、第7回対人援助学会、2015年11月1日、立命館大学衣笠キャンパス、京都府京都市

中村正、國友万裕、男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために(その4) - 男たちの反応/表出困難性についての考察 -、第7回対人援助学会、2015年10月30日、立命館大学衣笠キャンパス、京都府京都市

松本克美、金成恩、安田裕子、児童期の性的虐待被害とその回復をめぐる法心理 2 ドイツ・韓国調査の報告、法と心理学会第16回大会、2015年10月24日、獨協大学(埼玉県草加市)

Ayako Saito, Tatusya Sato, Are probationers/parolees really different from non-probationers/non-parolees after reintegration?: An analysis of employer interviews by applying the Trajectory Equifinality Model, The 9th East Asian Law and Psychology Conference, 2015年10月18日、立命館大学

安田裕子、松嶋秀明、久保樹里、齋藤絢子、大倉得史、森直久、更生の道を時間と社会に拓くということ 加害性と被害性に留意して、日本心理学会第79回大会、2015年9月24日、名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

サトウタツヤ、社会問題解決型心理学の可能性; 学際から学融へ、日本心理学会第79回大会、2015年9月22日、名古屋国際会議場

⑭ 廣井亮一、佐藤直樹、齋藤章佳、下郷大

輔、「加害者家族へのアプローチをめぐって」第34回日本心理臨床学会秋季大会 2015年09月19日神戸国際会議場(兵庫県神戸市)

⑮ 中村正、Recent Movement of therapeutic justice in Japan, The 4th International AOTEARA, Conference on Therapeutic Jurisprudence, 2015年9月3日、ニュージーランド、オークランド市、オークランド大学

⑯ 丸山泰弘、石塚伸一、尾田真言、市川岳仁、高橋洋平、森村たまき、「DARS薬物政策セッション~日本の薬物政策セッション~」、第15回欧州犯罪学会、2015年9月2日~5日、ポルトガル国ポルト

⑰ Saito, A., & Sato, T., Efforts to promote and maintain employment of probationers/parolees by cooperative employers. European Association of Psychology and Law + WORLD Conference 2015, 2015年8月4日、Nurumberg, Germany

⑱ Shinichi Ishizuka, "A New Trend of Drug Treatment in Japan: From Punishment to Harm-Reduction", 第34回法と精神健康に関する国際会議(International Congress on Law and Mental Health) 2015年7月14日~18日、オーストリア国ウィーン・ジグムント・フロイト大学

⑲ 中村正、What we need to know about offender therapy: From the context of family centered society, 2015年7月、The XXXth International Congress on Law and Mental Health、オーストリア・ウィーン市、フロイト大学

⑳ Makoto IBUSUKI, Shinichi ISHIZUKA, Hiroko GOTO, Tadashi NAKAMURA, Naomi Sugawara, "Recent Movement of Therapeutic Approach in the Japanese Criminal Justice", IALMH, 2015年7月12日、Wien, Austria

㉑ 中村正、國友万裕、男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために(その3) - ジェンダー違和感をもつ男性のエピソード分析をとおして -、第6回対人援助学会、2014年11月9日、立命館大学衣笠キャンパス、京都府京都市

㉒ 松本克美、村本邦子、安田裕子、金成恩、後藤弘子、児童期の性的虐待被害とその回復をめぐる法と心理、法と心理学会第15回大会、2014年10月26日、関西学院大学(兵庫県西宮市)

㉓ 廣井亮一、坂野剛崇、中川利彦、岡本潤子、矢代龍彦、「司法臨床の展開(第4報) - 家庭裁判所再考/家裁調査官の活動をめぐって」第15回法と心理学会 2014年10月26日 関西学院大学(兵庫県・西宮市)

㉔ Saito, A., & Sato, T., Efforts to promote and maintain employment of probationers/parolees by cooperative employers. 9th East Asian Law and Psychology Conference, 2014年10月19日、China University of Political Science and Law

㉕ 廣井亮一、柴田健「ストーカー加害者への司法臨床 - 逗子ストーカー事件の被害者ご遺族の報告をもとに」第14回法と精神・心

理研究会 2014年10月06日市民の権利ビル(大分県・大分市)

③③ Yasuhiro MARUYAMA、Current Japanese Drug Policy: Toward the Establishment without Dependence on Punishment、The 16th Annual Conference of European Society of Criminology、2016 22nd September、Germany

③④ 丸山泰弘、判決前調査と法曹三者以外の専門家、日本心理臨床学会 34 回秋季大会、2015年9月20日、神戸国際会議場

③⑤ Yasuhiro MARUYAMA、Criminalized Welfare: Problematic Issues of Partial Suspensions of Imprisonment、The 15th Annual Conference of European Society of Criminology、2015 4th September、Portugal

③⑥ 廣井亮一、「家族の過去、現在、未来」第33回日本心理臨床学会 2014年08月23日パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市)

③⑦ 丸山泰弘、問題解決型裁判所における法曹三者と支援者、日本心理臨床学会 33 回秋季大会、2014年8月23日、パシフィコ横浜

③⑧ 中村正、Community Support through "East Japan Family Support Project"、2014年5月3日、21th IFP World Congress of Psychotherapy、中国上海市

〔図書〕(計 11件)

Tatsuya Sato、Chitose Press、Collected papers on Trajectory Equifinality Approach、2017、213(単著につき全ページ)

稲葉光行、サトウタツヤ、安田裕子 他、新曜社、ワードマップ法心理・司法臨床(支援者支援 DV被害に遭った母子を支える支援者への支援)、印刷中

日本社会病理学会監修、高原正興、矢島正見、中村正、学文社、関係性の社会病理、2016、240頁(104-126)

廣井亮一、村松励、他 『犯罪心理学事典』、丸善出版、2016、840(722-723)

中村正、戸田洋平、戸城杏奈、西谷裕子、長井健一、指宿信ほか、第一法規、現代法律実務の諸問題、2015年、920頁(513-548)

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ、新曜社、ワードマップ T E A 理論編、2015、246(編集につき全ページ)

廣井亮一、町田隆司、坂野剛崇、他 『家裁調査官が見た現代の非行と家族—司法臨床の現場から』、創元社、2015、336(1-19)

村本邦子、荒木穂積、中村正共編著、晃洋書房、臨地の対人援助学、2015年、214頁(1-25,191-198)

二宮周平・渡辺惺之、中村正ほか、日本加除出版、離婚紛争の合意による解決の支援と子どもの意思の尊重、2014年、381頁(120-147)

サトウタツヤ・土田宣明・北岡明佳、ミネルヴァ書房、心理学スタンダード: 学問する楽しさを知る、2014、288(編集につき全ページ)

廣井亮一、サトウタツヤ、北岡明佳、土田宣明、他、『心理学スタンダード』ミネルヴ

ア書房、2014、276(241-253)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

指宿 信 (IBUSUKI, Makoto)
成城大学・法学部・教授

研究者番号: 70211753

(2) 研究分担者

安田 裕子 (YASUDA, Yuko)
立命館大学・総合心理学部・准教授
研究者番号: 20437180

後藤弘子 (GOTO, Hiroko)
千葉大学・大学院専門法務研究科・教授
研究者番号: 70234995

廣井亮一 (HIROI, Ryoichi)
立命館大学・総合心理学部・教授
研究者番号: 60324985

青木孝之 (AOKI, Takayuki)
一橋大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号: 40381199

丸山泰弘 (MARUYAMA, Yasuhiro)
立正大学・法学部・准教授
研究者番号: 60586189

石塚伸一 (ISHIZUKA, Shin-ichi)
龍谷大学・法務研究科・教授
研究者番号: 90201318

中村正 (NAKAMURA, Tadashi)
立命館大学・総合心理学部・教授
研究者番号: 90217860

佐藤達也 (SATO, Tatsuya)
立命館大学・総合心理学部・教授
研究者番号: 90215806